

小林 知 感覚のギャップ

カンボジアの農村で調査をしていて興味深いことのひとつは、時代感覚のギャップである。例えば、「今年にはカンボジアの歴史における節目の年である」という言い方は、国家中心の歴史観を反映している。今年には実際、国連が支援してカンボジアで行った制憲議会選挙（一九九三年）から二〇年目である。植民地支配から独立（一九五三年）して、ちょうど六〇年になる。対仏保護条約締結（一八六三年）からは、一五〇年目にあたる。

一方で、農村の人々は、生活に直結した変化にもとづく時代感覚をもっている。例えば、わたしが最初に調査を行った同国中部の国道沿いの村の人々は、国連や諸外国が支援した統一選挙があった一九九三年を、紛争終了の区切りとみなしていた。しかし、後に、そこから一〇キロメートルほど離れた疎林のなかの村では、一九九八年が戦争終結の年とされていることを知った。政治勢力としてのポル・ポト派が消滅するまで、治安が平常化したという実感が薄かったのである。

今年の八月末に訪れたカンボジア・タイ国境に連なる山の奥地は、二〇〇〇年になるまで、政府の行政組織に組み込まれていなかった。そこでは、元クメール・ルーージュ兵士の家族が、一〇年前まで自給自足の生活を送っていた。ここ数年は、森林の開墾を目的に低地から多くの人々が移住し、トウモロコシなどの商品作物を作付けする畑地を急速に拡げていた。

筆者は今回、その地域の役人氏を対象としたカンボジア語でのインタビューのなかで、居心地の悪さを感じた。それは、ジェノサイド政権として名高い、ポル・ポト政権の時代をどう呼ぶかの食い違いである。会話のなかで筆者は、「ポル・ポト時代」「クメール・ルーージュの時代」と話した。しかし相手は、「カンブチア・プロチアテパタイ」（「民主カンブチア」…ポル・ポト政権の正式名称）と、そのたびに表現を正した。

カンボジアのいまの政府は、「フン・センの政権」であり、いまは「フン・センの時代」だといわれる。でも、それを自明とした分析には、限界がある。言葉としては、カンボジアの人々自身が、よく、個人名を冠した時代区分を口にする。この意味で、「いまはフン・センの時代だ」という発言は、彼ら自身のものである。しかしその社会のなかには、首都の人なら何の違和感も無く使う「ポル・ポト時代」という言い方を避け、正式な国名を、誇りをもって使うことを望む人々がいるのだ。

国家や政府を対象とした議論だけでは限界がある。この夏に感じた居心地の悪さは、そう教えている。本特集号が取り上げるカンボジアでの選挙の結果にしても、「クメール・ルーージュ裁判」の意義にしても、人々のあいだに存在する感覚のギャップを、階層を横断した広域的な情報収集にもとづいて分析しなければ、本当のことは分からないのではないか。

こばやし さとる／京都大学東南アジア研究所准教授

専門は東南アジア地域研究、文化人類学。カンボジア農村に関する論文多数。著書に、『カンボジア村落世界の再生』（京都大学学術出版会、2011年）がある。